

ビルマ文字

加藤 昌彦

ビルマ文字の歴史は少なくとも 12 世紀の初頭まで遡ることができます。年代の特定できる最古の資料は、西暦 1112 年ごろに、パガン朝の第 3 代チャンシッター王の息子ヤーザクマーによって刻まれたとされる石碑、「ミャーゼーディー碑文」です。この碑文は、広大な平原に林立する 2000 以上ものパゴダで観光地としても有名なパガンの博物館に行くことができます。

ビルマ文字と形や綴り方がきわめてよく似ている文字に、モン (Mon) 文字があります。この 2 種類の文字は、しばしば、あわせてモン・ビルマ文字と呼ばれます。モン文字というのは、ビルマ族が今のビルマに入ってくる以前からこの地に住んでいるモン族の文字で、5 世紀か 6 世紀ごろには使われていたと考えられています。ビルマ文字は、形や綴り方の類似から考えて、このモン文字に多くを依拠して考案されたとされています。モン文字自体は、4 世紀ごろに南インドで使われていたパッラヴァ (Pallava) 文字に基づいているとされることが多いようです。

モン・ビルマ文字と同系の文字は、ビルマの少数民族であるシャン族、カレン族、パオ族などの言語を書き表すためにも使われています。また、中国雲南省のタイ系民族や、北タイの人々も、この系統の文字を用いています。

ビルマ文字の最大の特徴は、まるで視力検査表の記号のような、その形でしょう。一部の文字は、本当に視力検査表の記号と同じ形です。例えば、 \circ \subset \cup \cap は、それぞれ、「ビルマ数字の 1」「 η を表す子音字」「 p を表す子音字」「 g を表す子音字」です。では、ビルマ文字の実例を見てみましょう。

下に挙げるのは、日本語の「こんにちは」に相当するビルマ語「ミンガラーパー」です。

မိင်္ဂလာ ပါ

/mìnglà bà /

「ミンガラー」はパーリ語というインドの古典語からの借用語で、「吉祥」を表し、「パー」は丁寧さを表す助詞です。「ミンガラーパー」は学校教育用に作られたことばで、実際には、ビルマ人は「どちらへ？」などの表現を挨拶ことばとして使うことが多いのですが、場面や時間をあまり気にせず使えるので、外国人には便利です。

ビルマ文字の母音記号について 実をいうと、母音記号表の e に相当するビルマ文字の母音記号には、表中に示した \textcircled{e} 以外に、 \textcircled{e} があります。この記号は、他のインド系文字との形態上の類似から考えて、明らかに表の e の列に入れるべきものですが、スペースの都合で省かざるを得ませんでした。

\textcircled{e} を優先したのは、 \textcircled{e} のほうが \textcircled{e} よりも早い時期にビルマ語碑文に現われるからです。記号 \textcircled{e} は、現在では $[e]$ という母音を表します。

なお、ビルマ語の母音を表す記号には、 \textcircled{o} というものもあります。この記号もかなり後になってから現われたものなので、表には載せてありません。この記号は、現在では $[o]$ という母音を表します。

[参考文献]

- 西田龍雄「東アジアの文字」、『世界の文字』(西田龍雄編) 講座言語 第 5 巻、大修館書店、pp.211 - 278, 1981.
- 大野徹『現代ビルマ語入門』、泰流社、1983.
- 加藤昌彦『エクスプレス・ビルマ語』、白水社、1998.

(町田和彦編著『華麗なるインド系文字』白水社 2001, pp. 182-183 より転載)